

ひつじ雲 第二回

「終電車を楽しもう」

ウイルスと共生しながら」

96歳の佐藤愛子さんが「気が付けば終着駅」という本を昨年暮れに出された。終着駅と言ってもそこで佐藤さんがどのくらい滞在されるかはわからない。そんな歳までとはとても無理と思っている私としては、今月76歳の誕生日を迎えて一息ついていい。終着駅ではないとしても「終電車」に乗ったなという心境でいる。この終電車は終着駅まで幾つ駅があるかわからないが、ともかくこの「終電車の旅を楽しもう」と思っている。

それには、まず当面の新型コロナウイルスを乗り越えなくてはならないが、この感染症はなかなか治まらない。そんな折、「アフターコロナ」の議論が喧

しいので、何か考えるのに役立つ本はないかと本屋に立ち寄った。しかし、沢山並んだ感染症関係の本の中から選んだのは、イタリアのベストセラー作家（大学では素粒子物理学専攻）パオロ・ジオルダーノの「コロナ時代の僕ら」という本だった。前回の会報エッセイで「人類はもっと謙虚に生きるべき」と書いたが、コロナ騒動を考える視点や感性に共通するものを感じたからだ。彼の指摘の幾つかを拾ってみよう。

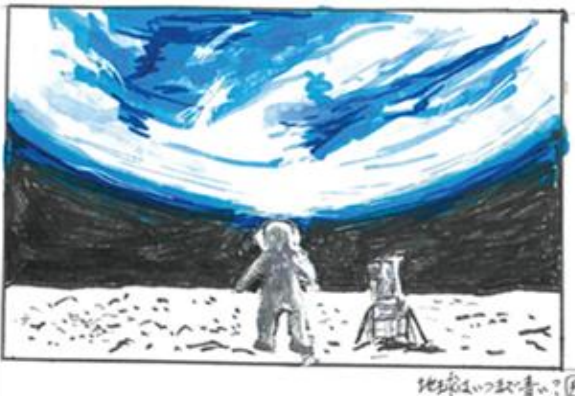
この文章を皆さんが読む頃（執筆は3月イタリアで感染が拡大し始めた頃）には状況はもっと悪化しているか、あるいは鎮圧されているか分らないが、それは重要ではない。今回の新型コロナウイルス流行の背景にある考察は、その頃も有効だから。何故なら今起こっていることは偶発事故や単なる災いでもないし、少しも新しいことでもない。過去にもあったし、これからも起きるだろう。

すでに感染した感染者と隔離人口（もうウイルスが感染させられない）以外は、これからウイルスが感染させられる感受性人口であるが、コロナウイルスにとってははまだ75億人近くもいる。

この感受性人口を75億個のビリヤードの玉に例えると、台上の玉の群れに感染した玉がひとつ飛び込んできて、ふたつの玉にぶつかって止まる。弾かれたふたつの玉はそれぞれふたつの玉にぶつかって止まる。この連鎖が永遠に続いて感染は広がる。

この時ふたつの玉にぶつかって止まるとしたのはこのウイルスのRo（アールノート、感染力を表す）が2ということ。これでは感染者は増加する。減少させるには1以下にしなければならぬが、それには私たちが行動を改め、多い人間に引越してきているから、異常気象と同じように新型の感染症が頻発するようになった」と考えるべきなのだ。そうすると、皆でビリヤード台上の玉を減らしてアールノート

を引き下げても、それは当面のウイルス対策にすぎない、根本的には元のウイルスが穏やかに住み続けられる環境を取り戻すことが必要なのだ。これまでのような限りない経済発展追及は、異常気象と感染症多発を併発するが、この二つの禍で多くの死者を出すことを覚悟するのか、全く新しい価値観に転換し、地球環境と他の生物と共生するライフスタイルに切り替えるのか、これが「アフターコロナ」の最大の課題ではないだろうか。



そしてそれにはジョルダンノも
言っていたように「地球全体で
ライフスタイル転換をする必要
がある」のだ。

ここまで考えてきて、ふとあ
まり賢そうに見えない世界の主
要国のリーダーの顔を思い起こ
した。「彼らじゃ大転換は無理だ
な。私が生きている間乗る終電車は、
ウイルスと災害に見舞われ続ける
旅になるのだろうか」と覚悟した。
それでも人生最後の旅だ。どう楽し
むか今から考えることにしよう。

(令和2年7月31日)